

(論 文)

『次郎物語』と下村湖人の思想

渡 部 治

キーワード

自律と協同 白鳥入蘆花 煙仲間 報徳社 異風者

1. 『次郎物語』の全体像について

下村湖人と報徳社

筆者は「国際経営・文化研究」Vol.19 NO.1 (2015年3月)に掲載した「二宮尊徳の人間観」の論において、下村湖人の『次郎物語』中のある記述について触れておいたことがある。それはその第五部のほとんど終盤にかかる叙述なのであるが、軍靴の響きの高まるなかで、自律、友愛、協同の精神を基軸とする「友愛塾」が閉鎖を余儀なくされ、その最後の研修旅行のなかで静岡の杉山報徳社を訪問する段であった。そこには湖人の理想とする共同体のまさに具現の姿が描かれていた。湖人は次のように書き綴っている。

第二日目は、報徳部落として全国に名の聞こえた、同県の杉山部落の見学だった。杉山部落は、歴史と伝統に深い根をもち、すでに完成の域にまで達しているという点で、新興革新の気になぎっているH村とは、まさに対蹠的だった。

明治維新ごろまでは乞食部落とまでいわれた山間の小部落が、今では近代的な組合の組織を完成し、堂々たる事務所や倉庫や産業道路などをもつに至ったその過去は、塾生たちにとって、まさに一つの驚異であった。

彼らはめいめいに自分たちの村の貧しい光景を心に思い浮かべながら、この富裕な部落をあちらこちらと見て歩いた。ほとんど平地に恵まれないこの部落の人たちは、過去数十年間の努力を積んで、山の斜面を残るくまなく、茶畑と蜜柑畑と竹林とにかえてしまったのである。その指導の中心となったのは片平一家であるが、すでに七十歳をこしていると思われる当主九郎左衛門翁の、賢者
1
を思わせるような風格に接し、その口から報徳社の精神と部落の歴史とをきくことができたのも、塾生たちの大きな喜びであった。⁽¹⁾

自律、友愛、協同の精神に立脚した協同体は湖人がその長として携わった青年団講習所（後述）の理想であったが、この記述にはそれが社会的現実として具現されている姿への湖人の深い共感が

わたべ おさむ：淑徳大学 国際コミュニケーション学部 教授

語られているだろう。言うまでもなく、報徳社は幕末の二宮尊徳の精神を継承するもので、湖人が尊徳に深い共感を抱いていたことは、『次郎物語』第五部の友愛塾の読書会の描写において、『二宮翁夜話』の一節（巻一の第二十八節）を、物語の重要人物である大河無門をして語らせていることをみてもわかる。⁽²⁾

このようにみえてくると、『次郎物語』の特にその第五部は、時代における湖人みずからの経験と思想が最も集中度の高い次元で語られているものと考えられるのであって、その意味でも、第四部までの流れと異質の感を抱かせるものがあると言える。本稿はその第五部の問題を中心に湖人の思想を総括しようとするものであるが、そのためにも、『次郎物語』の全体像を理解しておく必要があるであろう。

『次郎物語』の全体像

『次郎物語』は何より孤高の文学である。その意味はそれが「文壇」の外で評価され、受容されてきたということ、そもそも作者湖人がそのような「文壇」での評価とかかわりを一切求めなかったという経緯にかかわっているのであるが、そのような外的な事情はもとよりのこと、『次郎物語』の内的主題そのものの性質がその「孤高性」を根柢において支えている。

それは人間の教育の問題であった。言い換えれば、人間はいかにして人間になってゆくかという精神の成長の道筋を真率に問う姿勢であった。このような取り組みの姿勢は意外にも日本の近代文学においては貧しい。家や時代からの反逆者、余計者としての自己の、いわば「告白性」を大きな主題としてきた日本の近代文学の枠組からみれば、それはあまりに「陳腐」な姿勢にほかならなかった。しかし、この主題の性格こそ『次郎物語』の作品としての個性を明確に彫り上げているのである。

湖人にとって、教育とはすぐれて人間的な精神の躍動の問題であった。それは教育する者とされる者の両者によってなされるものであるがゆえに、他者にどのように立ち向かうかという教育者としての問題とともに、湖人においては、より深く自己自身をどのように「教育」するかという自己内省の問題によって成り立っている。繰り返すように、この問いの真率さは、近代以来、社会と制度の矛盾のなかに「余計者」の「告白」として展開してきた感のある日本の近代文学にはあまりに異質なものに映じたであろう。『次郎物語』が近代文学史に持つ孤高の性格は、この小説に託せられた、あたかも真昼のような人生への問いのこの真率さによっている。

この真率な自己探求は湖人みずから自身の人生を問い返す強い意志によって支えられていた。もとより、湖人の心底には虚構の構想において文を書くという発想は一貫してなかった。湖人において文筆活動は常におのれの人生を振り返ることに等しかった。その体験と読書のなかから思策を立ち上げ、愚直といってもよい筆力によって、文章を彫り上げていった。湖人のどの文章を読んでも実感されるのは、あたかも正座して語りかけるかのような実直さで、そこには少しの精神の陰りもない。人生の苦悩を扱いながらそのことを弄ぶ気風は少しもない。『次郎物語』の根底にあるのはこの前向きな人生探究の姿勢なのである。

『次郎物語』成立の事情は、湖人の「高弟」、永杉喜輔の『下村湖人伝』（著作集4 国土社1974）、明石晴代の『次郎物語』に賭けた父・下村湖人』（読売新聞社 1972）等がまず筆頭にあげられよう。この二書はそれぞれの立場から、『次郎物語』成立の背景をよく叙述しているのであるが、特に後者は実の娘の視点から、寄り添った父親の内面の襲を明らかにしており、貴重な一書となりえている。

『次郎物語』の特色は湖人の人生の道筋に寄り添うように物語が展開されているところにあると

言える。

すなわち、湖人にとって、自己の人生を振り返れば、まず寂しさと愛情に飢えた里子の体験があった。それは明石晴代の前掲書に書かれているように、上京した二十二、三歳の頃に、本郷の下宿で「生立ちの記」を書いてみたいと思い、幾日も頑張って五十枚ほどの原稿を書いてみたことがある（これはのちに破り捨てられた）というほどに切実なものであった。湖人はまずこの問題を扱うなかで親と子の愛情の問題を探究したのである。この問題が『次郎物語』の最初の主題であり、ほぼ一部、二部の展開のなかで語られている。

次には、湖人にとって、教員としての長い生活の軌跡があった。明治44（1911）年、27歳のとき、母校佐賀中学校の英語の教師となってより、昭和6（1931）年、47歳の折、台北高等学校長を辞任するまでの約20年間である。そこにおける教育体験の問題があった。次郎を核にして言えば、次郎の人間関係が親子から学校という舞台に移り、そこで、師弟や人間の絆とは何かということが教育の問題に即して探究された。しかるに、それは湖人みずからが自分の人間としての苦悩と成長を次郎に託して語られたものにほかならなかった。これらの経験と思索が第三部、第四部に生かされている。

次にまた湖人にとって、学校教育の生活から離れ、青年団教育に打ち込んだ日々があった。昭和8（1933）年、大日本連合青年団講習所長となって、昭和12（1937）年、その職を離れるまでの4年間である。僅か4年の時間であるが、湖人にとってある意味で人生の正念場といってもよい段階であった。『次郎物語』第五部に語られたのはこの生活である。そこではやはり次郎に託して、社会や政治とのかかわりが語られたのである。

しかし全五部は別々の主題ではない。全五部を鳥瞰するならば、結局、全五部を構成する各主題は重層的に連なりながら、あたかも協奏曲を奏でるかのよう、第五部へと総決算されるのである。

こうしてみれば、『次郎物語』全編は一貫して湖人みずからの人間的自己検証の過程であると言える。自伝的性格が強いと言われるのもその内的な連続性においてであって、事実としての記録という意味に止まるものでは当然ない。それにしても、湖人の教員としての生活、また著述の生活が戦時体制の激化してゆく過程にちょうど重なっているということは、人間の運命の時代との不思議な縁を語るものであろう。難しい時代であったからこそ、湖人はみずからの情念を逆に揺り動かされ、ものを書き行動することができた。そういう人間としての生き方のひとつの「幸福」を私たちは湖人の人生のなかに見ることもできるだろう。

成立年時について言えば、『次郎物語』は最初の著作が昭和16年にまず刊行され、それで終わるはずだったものが、思いのほかの評判に励みを得て、昭和17年に『続 次郎物語』（のちの第二部次郎物語）が、ついで、昭和19年には第三部が刊行された。つまり戦前までに第三部までが書かれたことになる。ここで湖人の思想的主題を抽出しておくならば、一部、二部において、親子、兄弟の愛情と葛藤の問題に多くの頁を割いたことに加えて、のちに次郎の恩師となる朝倉先生との出会いが重要な転換になろう。ここで湖人は朝倉先生をして『葉隠』の思想を語らせている。この『葉隠』の精神こそ『次郎物語』の精神的な土台としてそのあとも想起されるのである。みごとに死ぬことはみごとに生きること、その生きるということは日常の小事のなかに誠実に生きることであるという湖人の思いがここに託されている。

また、次郎の中学校時代の後半を描く第三部において「白鳥会」の描写がある。それは朝倉先生を慕い、朝倉先生を中心とした生徒たちの集まりであり、「白鳥入芦花」という玄関に掲げられた額の意味のなかに、やはり湖人がこの物語に込めた思いが語られるのである。このことについては後述するが、禅と武士道が湖人の根底の教養となっていることが知られる。

第四部が書かれたのは戦後の昭和24年であった。すでに太平洋戦争が終了し、戦後の新しい日本が出立したその時期に書かれた。内容は朝倉先生の辞職問題をめぐるもので、漸くこの物語のなかに「政治」と「社会」の問題が顔を出し始めた。というより、湖人は、ここにおいて、戦前の激烈な時代を回顧し、そこにおける自己の教育的戦いの記録を残そうとしたのであろう。『次郎物語』の性格もここで大きく変貌するのである。

そして第五部は、学校を追われた朝倉先生が開く青年団講習所、これは現実に湖人の体験そのものなのであるが、その青年団講習所の生活の記録とも言える過程を描く。朝倉先生のを追うように、学校を退学した次郎が助手役として合流する。やはり根底に教育の主題は流れているが、学校教育の問題というより、青年団講習所に舞台を移すことによって、『次郎物語』の主題は個人的な次元の問題から、時代と社会そのものの存在のありようを問う普遍的な問題に立ち向かってゆくことになるのである。

一篇の小説がこうして戦前から戦後の大きな時代の推移のなかで書き継がれたということは、それ自体が稀有なことであるが、それ以上にこれを書き進める湖人のなかに価値観のぶれがなかったということは、これもやはり稀有なことであった。『次郎物語』のひとつの価値もそこにあるであろう。

2. 青年団講習所の時代及びその歴史的経緯について

時代背景

先にも述べたように、湖人の教育者としての履歴は明治44(1911)年、27歳のとき、母校佐賀中学校に教鞭をとったときから始まり、大正14(1925)年、台湾に移り、その地での中学、高校の校長を経て、昭和6(1931)年9月に離台するまでの時期である。湖人は47歳になっていた。そして生涯の盟友であり郷里の先輩であった田澤義鋪たざわよしはるの慫慂により、大日本連合青年団講習所の所長として昭和8年4月から昭和12年4月までこの職に打ち込むことになったのである。もとより、学校教育に限界を感じ、地域青年、農村青年の私塾的教育に本来の教育の可能性を期待していた湖人にとって、青年団講習所は水を得た魚の心境であったであろう。

ところで、昭和とはいかなる時代的問題を抱えていたか。顧みるならば、湖人が離台する昭和6年とは、その9月18日、奉天郊外の柳条湖で満鉄線路爆破事件が起こったのである。いわゆる満州事変である。関東軍の謀略であり、関東軍は中国側の仕掛けであるとして、これを契機に、本格的な軍事行動を開始し、中国各地の占領を開始した。これ以後、泥沼の日中戦争が継続されていくことは周知のことであろう。

一方、国内では、1928年にニューヨークに端を発した株価大暴落、世界恐慌は、日本の産業界を直撃し、農村は大きな打撃を受けた。冷害による凶作ともあいまって、特に、東北地方の実態は悲惨であり、婦女子の身売り等が大きな社会問題として注目を浴びた。こうしたなかで、私利私欲、党利党略に走る権力を批判する動きが出てくるのは必然であり、クーデター、暗殺の事件があいついでいる。そのなかでも、昭和7(1932)年5月15日、海軍青年将校の団が首相官邸を襲って、犬養首相を射殺した5.15事件、昭和11(1936)年2月26日の未明に陸軍皇道派系の急進的青年将校千数百名が蹶起して、一連の暗殺事件を起こした2.26事件(『次郎物語』第五部にもとりあげられている)は象徴的なものであろう。時代は軍部独裁の様相を深め、泥沼化する日中戦争の深みのなかで、やがて英米との対立が先鋭化し、戦争の時代に入ってゆくのである。すなわち、湖人が青年団講習所の所長を勤めた昭和8年から昭和12年という時期は、日本が本格的な戦争の時代に突入してゆく転換期とほぼ合致する時期なのである。

このことは『次郎物語』第五部の性格を考える上でまことに象徴的なことなのである。むろん、湖人はこのような過激な行動を肯定するものではなかった。その意味で、湖人みずから第五部の末尾に「次郎の生活記録は、こうしていろいろな問題を残したままその第五部を終わることになるが、この記録は、見ようでは、彼の生活記録というよりは、むしろ満州事変後急速に高まりつつあったファシズムの風潮に対する、一小私塾のささやかな教育的抵抗の記録であり、その精神の解明である」と述べているのは、第五部の性格を正確に語っているものである。そうしてみると、この稿の最初にあげた研修旅行の杉山報徳社訪問の段などは、あたかも、湖人とその同行の人々が時代のなかに「滅びて」ゆくレクイエム（鎮魂曲）として、改めて美しい色彩を持って読むものに映じてくるのであるが、それならば、湖人の胸中にあった思想とはどのようなものなのであろうか。それよりもまず、湖人が打ち込んだ青年団教育運動とはどのような歴史的経緯を持つものなのであろうか。

田澤義鋪と湖人をつなぐもの

このことを考えるについては、湖人が終生、敬愛した郷里の先輩である前述の田澤義鋪をあげなければいけない。湖人に『この人を見よ』という田澤義鋪の評伝があり、それは、湖人が体調思わしくない晩年であって、入魂の気迫をもって書きあげたものであった。⁽³⁾ 以下、田澤の尽力によって、近代日本における青年団が組織されてくる経緯を湖人の叙述のうちに窺おう。

田澤義鋪は明治18(1885)年、佐賀県鹿島の古い士族屋敷に、父義陳(よしのぶ)、母みすの子として呱呱の声をあげた。8歳上に姉がいた。父義陳は藩主鍋島直彬(なべしま なおよし)に仕え、明治維新の労苦をともにしたという。熊本の高小から東京帝大の法科に入学し、政治学を専攻、明治42年の卒業後、高等文官試験に合格し、明治43年の4月末、静岡県庁に赴任した。このように書くと、ものわりの悪い形式主義者のようにもみえるのだが、もともと相撲に親しむなど剛毅な人柄で、人間をみる透明な義侠の心を持っていたという。そういう田澤が役所の上下意識や形式主義に馴染まなかったことは容易に想像されるが、湖人は田澤の心に終生忘れえぬものとして刻印された体験を記述している。それは田澤が大学を卒業する前に休暇を利用して、満鮮地方に旅行したときの感慨であった。田澤の目には日露戦後の日本人の傲慢さがことさらに印象された。中国の苦力^{クーリー}などへの非人道的な扱い、態度。田澤はその風景に驚愕し、憤り、悲しんだ。そして、彼の胸に久しく培われてきた道義感が猛然と目覚めてきたという。湖人は次のような田澤の感慨を伝えているのであるが、それは湖人のその後の人生態度の根底を貫く姿勢そのものである。日本青年団講習所の精神もこの思いから発するものであり、湖人が『次郎物語』第五部の友愛塾の精神として刻印しようとしたものである。

海外発展? それは何だ。もし日本民族の情感と同義とが永久にこのままであるとするならば、それは発展どころか、恥辱の拡大であり、民族的怨恨の種を蒔き散らすに過ぎないのではないか。それでは地図の上ではどんなに発展しようとも、遠からず国の基礎が揺らぐであろう。道義なくして何の国家だ。日本は東洋のならず者になってはならない。そのために今何より大事なことは、国民性を人類的・世界的立場に立って矯め直すことだ。大国民的性格の教養! そうだ、これこそ国民生活の全部門をあげての基調をなすものでなければならない。とりわけ政治と教育とにおいて然りだ。⁽⁴⁾

5

このような感性を持っていた田澤が通常の役人生活に安住できるはずもなかった。数え年26歳で静岡県安倍郡の郡長に任ぜられたが、これこそ青年団教育への田澤の開眼を導いたものであった。

改めて役所の外に目を向ければ、働く青年達の教育から置き棄てられた現実があった。しかし彼らこそ日本の未来を背負うものではないのか。田澤は彼らと胸襟を開いて座談を重ね、休みなどはあつてなきもの、草履掛けで遠い山村にもしばしば足を運んだ。そうするうちに、田澤の念頭にあがつたのが、日本の歴史における青年（若衆）の自治的伝統の精神であり、それが維新後の近代化のなかで失われてゆく現実であった。そうして始めたのが郡長みずから講師を務める宿泊講習であり、これは当時としては、役人的概念から突出した破天荒のふるまいであったという。

明治天皇薨去の際、明治神宮造営が企図せられ、この国民的大事業に際して、造営局総務課長の椅子についたのが田澤である。しかし労働力の不足は決定的であった。そこで、田澤はこの造営事業において全国青年の力を結集することこそが必要であると確信した。技術陣からは当初到底受け入れられもしなかったこの提案が田澤の熱誠により許諾され、青年団奉仕の募集が発表されるや、全国各地から申し込みが殺到した。以下、湖人の記述である。「結局二百八十余団体、延日数十五万日の奉仕となったのであるが、各地から送られた十八歳から二十五歳までの粒選りの青年たちが、日中は専門土工と同様に激しい労務に従事し、朝夕は造営局急造のバラック宿舎で、名士の講演を聞いたり、懇談をしたり、その他、いろいろの修養的行事をやったりして、共同生活を営んだということは、実に、歴史はじまって以来のことだったのである。」⁽⁵⁾

こうした経緯の上に、大正10年の財団法人日本青年館の設立があった。そうして、日本青年館の建設が目指された。途中、震災の影響もあり遅れたが、会館は大正14年9月に完成した。「その総工費百六十万円は、すべて全国の青年の醸出によるもので、その中には国庫の補助も富豪の寄附も含まれていない。それこそまったく青年の勤労と節約、熱と汗との結晶であった。」⁽⁶⁾

こうして本稿の最初に戻るのであるが、大日本連合青年団に、田澤の指導によって、青年団指導者養成所が開設されたのは昭和6年であった。昭和大典の建造物の一部が青年団に払い下げられ、それを主材料として、東京郊外の小金井に「浴恩館」と称せられた建物が作られたのである。年数回、全国から数十名の青年が寝食を共にした六週間程度の長期の生活をする。湖人がここの専任の所長となったのは昭和8年、このとき、名称は「青年団講習所」と改められ、湖人の多忙な生活が始まった。この所長を勤めるにあたっては、田澤義鋪と湖人の間に肝胆相照らす了解が当然あったと考えてよい。ここの生活の記録は湖人の『塾風教育と協同生活訓練』（昭和15年）に活写されている。

3. 下村湖人の思想・教育観

近代教育の反省と塾風教育の必然性について

下村湖人全集十巻の特色はそのどれをとっても湖人の人生観、人間観を繰り返し説く論に満ちていることである。そうして、湖人の人生観、人間観をその根底において貫いているものは「人間生命の大肯定」であると断言できるであろう。湖人の人生観、人間観が体系的に論ぜられているものとして、前掲の『塾風教育と協同生活訓練』があげられる。湖人が青年団講習所の所長を辞したのちに書かれたものであり、従ってその経験の総括ともなっているが、その第一部に湖人の基本的な教育観、人間観が塾風生活の意味に即して論ぜられている。その論を要約すれば以下になるであろう。

湖人の根底にあるものが「人間生命の大肯定」であるということは、言い返れば、湖人が人間の存在を限りなく発展する存在であると考えていることを意味する。その意味で過去（伝統）はたえず乗り越えられねばならないが、それはいたずらに過去を否定することなのではない。生命は歴史

のよき継承者でなければならぬ。そこに文化の一貫性があるのである。

このような前提から、湖人は過去の教育を批判的に回顧するのであるが、特に、明治以後の教育が検討される。それは教育の国家管理、組織の統一化としてあらわれ、平均的学力の向上には短期間に驚くべき成果をあげたのであるが、その反面、失われるものがあった。それは、教育という営みのなかにあるべき人間性である。湖人はこの点において、明治以前の持っていたいわゆる塾風教育の個性をあげるのである。そこにはなにより師弟の人間的接触があった。そして、地方的特色や個人的色彩に豊かなものがあった。そもそも教育は教育者と被教育者の人間関係によってなされるものであるが、教育者の立場のみ一方的に強化され、被教育者の個性が無視されるところに教育の実りはない。最も重要なことは、被教育者自らの自律性と創造性の確保なのである。明治以後の近代化のなかで失われたものもこの被教育者の個性であったのではないか。

こうして湖人は近代における新しい教育の可能性を「学校」の外の塾風教育に求めたのである。今、それを可能にする主体は全国の農村青年であった。農村こそ日本の伝統、文化の主体であり、農村青年はその推進力とならねばならぬ。青年団講習所はこのような湖人の理想をみごとに顕現するものとして映じた。

そこで求められたのは、一部のエリートを育てることではなく（「青年団講習所」の名称から「指導者」の語をあえて外した）、平凡な日常生活の実践のなかで、塾生個々の友愛の協同体を実現することで、それを土台にして地域社会的、職能的な組織化を図ることであった。それは『凡人道』や『烟仲間』の所論にも通じるものである。⁽⁷⁾

湖人によれば、日本的性格の三大欠陥として、科学性の欠如、自治能力の不足、持久力の薄弱さがあげられるのであるが、塾風教育の生活はこれを克服するものでなければならなかったのである。

従って、号令一下、無分別に行動することばかりを身につけるような振る舞いも求められない。大上段に振りかぶったようなスローガンも不要である。平凡な日常の繰り返しのなかで生活の知恵を出し合い、みずから組み立ててゆくことである。その集積のなかで日常と体験に即した自治の能力が生まれるのだし、生活の持久力も生まれる。生活の知恵は異常な体験や我慢のなかにあるのではない。個々の友愛の積み重ねのなかで生まれる知恵と努力こそが重要なのである。青年団講習所はこのような湖人の祈念の実践の場としてあったのである。

『次郎物語』第五部に描かれた友愛塾は、その描写のどこをとっても、以上のような湖人の思いの現れていない箇所はなく、『塾風教育と協同生活訓練』第二部の「杜の協同生活記」は実際の青年団講習所の体験を記録したものとして、『次郎物語』の友愛塾の描写と重なるのは自然のことであった。永杉喜輔は『次郎物語』第五部はまさにこの講習所の実践記録の「物語化」であるとすら明言する。

湖人はみずからのそういう思いを『次郎物語』第五部において「朝倉先生」に語らせている。朝倉先生に託せられた重要な発言は第五部において二か所出てくると考えられる。最初は新しく入ってきた塾生に挨拶として語ったもので、湖人の根幹の思想が語られている。そこはかなり長文の「朝倉先生」の「講演語録」といった感を持たせる部分になっている。一体、第五部は、主人公（つまり湖入）の思想的陳述に割かれる部分が多く、この点からだけみても、特に第五部の『次郎物語』の「小説」としての特殊性を示しているのであるが、「朝倉先生」をして湖人はつぎのように語らせる。それは、この塾堂の生活のありかたについてのものであった。

朝倉先生は、まず寮生にこの場所を「絶海の孤島」と思ってもらいたいと提言する。もはやここに上下の関係や命令の系統はない。我々は偶然にしてこの「絶海の孤島」にたどり着いた「同行」の仲間なのである。それならば、我々に今いちばん必要なものは何であろうか。それはともに仲良

く暮らしたいという「自然の人情」であろう。人間はなんといっても、憎みあって暮らすより、仲良く暮らすことを求めるものだ。すなわち「人情の中の人情、つまり一切の人情の基礎をなすものは愉快になりたいと願う」心である。しかしその心は惰性やなれ合いであってはならない。大切なのは「お互いに人間を伸ばしあうようにたえず心を使う」ことである。そのためにはときとして、氣にくわぬことを言ったり、尻をたたきあったりすることも必要かも知れない。しかしそれもやがて大きな喜びに変わってゆくのである。「それは心が深まるからである。そしてそうなる人間が加速度的に伸びていくのである」。そしてそのためにも「お互いの生活に組織を与えるための工夫をしてもらいたい」。組織といったところで、この共同生活のその痕跡があるわけでもなんでも無い。一切は白紙である。「法律・制度・規則・命令といった種類のものは何一残されていない」のである。お互いがめいめいの知恵を出し合って新たにつくりあげてゆくよりほかにないのである。「守るべき法も、従うべき権威も」存在しないのである。必要なのはひとりひとりの創造の精神である。「めいめいが正直に、生き生きと自分の全能力を発揮しつつ、矛盾衝突を克服し、それを全体として総合し、統一してゆく、そういう過程が何より大切なのである」。(8)

朝倉先生をして語らせた青年団講習所という塾堂生活の要領はおよそ以上の要旨に尽くされるのであるが、湖人の思いの根幹が遺憾なく表出されていることがわかるであろう。

人間の生活の根本は異常な大事にあるのではなく小事の連続にある。平凡な日常生活のなかで、互いに知恵を出し合い、人間性を高めてゆくことこそが大事なのである。声高なスローガンの必死の命令も覚悟も不要なのである。人間の自然の情に背くそのような振る舞いを湖人は否定した。第五部で描かれた生活はその試行錯誤ともいべきものなのであるが、それは当時のしだいに狂気じみてゆく国情への湖人の抵抗の表現でもあったのだが、そういう生活が軍靴の音の高まってゆく国情のなかで許容されるはずもなかったのである。湖人は決して体制の否定者ではない。むしろ純朴すぎるほどの体制の肯定者であり、「皇国」の繁栄を心より願う人間であった。註⑧に示した『我らの誓願』の項目がそのことを明らかに示している。しかし、国への愛情の根本は人間としての自然の情のなかにある。狂熱的なものとは無縁のものである。穏やかな自然の情こそ国家を支える人間の基本とみるのである。

従って、先にもあげておいたが、湖人は『次郎物語』第五部において、朝倉先生をして次郎に次のように言わしめてもいた。「見事に死のうとするところ、見事に生きようとするところとは、決してべつべつのところではない。見事に生きようとする願いのきわまるところに、見事に死ぬ覚悟が湧いてくるのだ。生命を軽視し、それ大事に護り育てようとする願いを持たない人が、一見どんなにすばらしい死に方をしようと、それは断じて真の意味で見事であるとは言えない」。(9) 第五部は戦後に書かれたものであるが、同様のことは昭和18年に書かれた『青少年のために』において、すでに次のように述べられてもいた。すなわち、見事に死ぬほどの人はひごろからそれだけの用意ができていたのであって、それは「見事に死ぬ覚悟というよりも、見事に生きる覚悟なのです。つまり、「ふだんはどうでも、まさかの時には命を捧げるんだ」といったような、あてにならない気持ちだけの覚悟でなく、毎日毎日の行いのうえで、自分のすべての力を、お国のために捧げて行こうという覚悟なのです」。まさに湖人の愛した『葉隠』の精神にそのまま通じるころである。(10)

朝倉先生に語らしめたさらなる要点というのは、こうした事情のなかで友愛塾の存続が危ういものになり、やがて閉鎖に追い込まれてゆくなかでの次郎との会話のなかに示される。次郎はやりきれない。敢然と立ち向かってゆくことを主張する。次郎には、体制の圧力のなかで黙々と塾を閉じてゆく朝倉先生の姿勢が一種の「敗北主義」と見えてならなかったのである。そのことについての朝倉先生の所論はむしろ項を改めた方がよいであろう。

「煙仲間」への展望について

『次郎物語』のなかで友愛塾の後ろ盾となって描かれる「田沼先生」は田澤義鋪がモデルになっている人物であるが、友愛塾が追い込まれてゆくなかで、朝倉先生とともに、次の道を選択することになる。それは全国行脚であった。全国行脚といっても、声高に演説して回るのではない。全国に散らばっている友愛塾の仲間たち、その出身者たちを訪ね歩く旅である。そこでかわす座談の旅である。しかし次郎にはそれがいかにもこころもとないものにうつる。そんなことでいいのだろうか。それが「抵抗」と言えるのだろうか。今の時代に必要なのはもっと激しい抵抗の精神と行動なのではないだろうか。朝倉先生は語る。「君は、一粒の種をまく、という言葉を知っているだろう。ほんとうの仕事はその一粒からはじまるものなんだよ。こないだ読んだ本のなかにあったことだが、レドレーとかいう宣教師が中国の西の果のある土地にはいりこんで、二十年間宣教をしたが一人の信者も得られなかった。ところが、その翌年になってやっと一人の信者ができると、そのあとは年々加速度的にふえていって、今ではその地方の住民がほとんど全部基督教徒になってしまっているということだ。私も及ばずながら、それに学びたいと思っている。実は、白状すると、私もこの話を知るまではなかなか決心がつかなかったがね。」「愛情はあらゆる運命をこえて生きる。それは破滅の悲劇にたえて行く力でもあり、破滅の後の再建を可能にする力でもあるんだ。人間の社会では、愛情だけがほんとうの力なんだよ。それさえあれば無からでも出発ができるし、反対に、それがなくては、あらゆる好条件がかえって破滅の原因にさえなるんだ。」⁽¹¹⁾ このように書いた湖人の念頭に、敗戦の1年前、昭和19年3月、四国の善通寺奥殿で開かれた「地方指導者講習協議会」の席で田澤が語ったという次の発言が去来しなかったであろうか。

皆さんは、戦争の前途をまだ楽観してられるかも知れない。戦争は外地で行われて、国土が直接大きな危険にさらされるようなことは、まさかあるまい、という風にお考えの方がもあるかも知れない。しかし、やがて敵の艦隊は海をおうて国土にせまり、艦砲射撃をあげせざるでありましょう。航空機は空をおうて飛来し、われわれの頭上から爆弾の雨を降らすでありましょう。敗戦はもはや絶対に避けたいことであります。遺憾ながら、この苦難を通らなければ平和は来ませんし、日本も救われません。皆さんは、この苦難をどうしてきりぬけその後の日本をどうして守り育て行かれるか今はその覚悟をなさることが大切であります。」⁽¹²⁾

註⑦にも言及してあるが、昭和18年に刊行された前掲の『煙仲間』（全集第6巻所収）はこうした湖人の思想を実践のなかで体系化したものとしてみるのであろう。そもそも「煙仲間」の名称は『葉隠』にそのヒントを得ていることも想起しておきたい。その第二巻を湖人はあげている。

恋の至極は忍ぶ恋と見立て候。逢うてかは恋のたけが低きなり。一生、忍んで思い死するこそ、恋の本意なれ。歌に、

恋死なん後の煙にそれと知れついにもらさぬ中の思いを
これこそ丈高き恋なれ、と申され候えば、感心の衆四、五人ありて、煙仲間と申され候。

ところで、このような物言いのなかに何か「深刻味」をみてはいけない。湖人の思索を追ってゆくと、湖人の思索の本質が必ずしも論理的でないことがわかる。湖人の思索の本質は論理的であるよりも感性的である。十代の頃に文学を志したことから言えばそれは納得できるが、この感性を禅や論語の教養が豊かに覆い包んでいる。このように「煙仲間」と称せられた人間の振る舞いはいか

にも悠然としたものであるが、しかし、ここに託せられた湖人の思いは言うまでもなく真剣なものであった。それは、自己が徹底して地域社会のなかに個として入り込み、その徹底した無私の実践によって地域社会及び国家形成の捨て石となる人間の実践を言い当てる湖人の表現であった。このような立場を湖人は「直に須らく無寸草の処に向かって去るべし」という一句に委ねた。⁽¹³⁾ 湖人によれば、それは「一切の執着を絶ち、知慧才覚を乗り越えて、本来無一物の境地に還れ」という意味である。湖人の思想の根底にある禅の哲学の素養の反映したものと言えるが、言うまでもなくそれは「世の中を逃げ出せ」という意味ではない。湖人は言う。「禅において無は、同時に無尽蔵であります。大否定であるとともに大肯定であります。更にいうと、いわゆる花紅柳緑で、一切をそれぞれの姿において生かさんがための大調和の心境なのであります。そして、これはやがて煙仲間の心でなければなりません。」これをみれば、煙仲間としての組織と連帯は、かたちとしてありながら、常にそのかたちをこわしてゆくものでなければならぬ。自立する個として縦横自在に社会のなかに入り込み、人それぞれの個性を活かしてゆくような動きでなければならぬ。そのための絶好の場所は地域社会、郷土である。湖人は人がこの郷土に根付くことを何より願ったのである。

「煙仲間」の精神については、また『次郎物語』第三部との関連をみるべきであろう。先にも述べた朝倉先生を慕う生徒たちの私的な集まりである「白鳥会」の段である。会は、たいていは学校帰り、朝倉先生の私宅で開かれた。部屋に掲げられている掛け軸に「白鳥入芦花」と書かれている。「白鳥芦花に入る」。その意味が次郎はわからなかった。そして朝倉先生のときほぐしが述べられている段である。「どうだ、もうたいてい意味だけはわかったろう。真白な鳥が真白な芦原の中に舞い込む。すると、その姿が見えなくなる。しかし、その羽風のために、今まで眠っていた芦原が一面にそよぎ出す、というのだ。お互いに、この白鳥の真似がしてみたいものだね。しかし、なかなかむずかしいぞ。それがほんとうにできるまでには、よほど心を練らなくちゃならん。自分の正しさに捕われて、けちな勝利を夢みているようでは、とても白鳥の真似はできるものではない。良寛のような人でも、『千歳のなかの一日なりとも』と歌っているくらいだからね。」⁽¹⁴⁾

この「ときほぐし」が直前のある村の青年団体の話に続けてなされていることをみれば、まさしく「煙仲間」の神髄を言っていることが納得されるだろう。その村の三十代の若い人たちが熱心に村の改革を考え、意見を出し合い、企画をたて、その実現を誓い合っているのであるが、かれらは決して出しゃばったことをしない。おおぴらに団体の決議などと、発表したりすることもない。ひとりではできないことは率先して実行するし、めいめいの自分の身のまわりから世論をつくりあげていくのである。「いわば村の地下水となって村民の生活をうるおしている」ような存在なのであるが、これこそまことの公共に仕える道ではないか。

自然体で入り込み、人々の人情に沿って生活に即した取り組みをしていくのである。組織にあって組織にあらず、個にあって決して個にあらず、その根底に厳しい自己凝視があってこそ可能な行動なのである。「煙仲間」とは吃驚な物言いでもあるけれど、それは、戦時体制の圧力のなかにあって、湖人が表現しうる最大の抵抗の表現であった。言うまでもないが、それが「抵抗」と意識されたとき、
10 「煙仲間」の存在が瓦解するものであることも言うまでもない。『煙仲間』から一年後の昭和19年に書かれた『われらの誓願』は「煙仲間」の精神を五つの信条に要約しているものである⁽¹⁵⁾。

この白鳥会の精神の解きほぐしについては、湖人の盟友であった高田保馬が『定本 次郎物語』(池田書店 昭和33年)の解説において、簡にして要を得た説明をしていることにも留意したい。高田の解くところを以下に引いておきたい。高田によれば、それは作者が熊本の五高時代に野々口講師から学んだ老荘の思想に結ぶものがあるのではないかというのであるが、それは「強く名利を排し、従って無名を道とする」精神である。ここに道徳的自責の念が強く結びつく。このことが凡人

道を歩いて無功名をめざす所以となるのである。それゆえ、「積極的に善をなすにあたって、その動機の中に、自己の名声功績を求める邪念が交わることを徹底的に斥ける。即ち一には道念の純粹を求めると共に、他の一には小我を徹し去って、無に住しようとするのであろう。白鳥飛来して蘆花に入る、葦花風を受けて動けども、白鳥のいずこに入り、何をなしたかは分からない。無名の浄化とでも表現しうべきものか。」⁽¹⁶⁾

「無名の浄化」とは言えて妙の表現である。まさに『次郎物語』において到達した湖人の境地はこの「無名の浄化」の精神であり、それは煙仲間の根底を貫く人生態度であった。

4. 総括

下村湖人の思想とは要するに教育とは何かという論点につきる。それは教育者として半生を生きた湖人の当然の思いでもあった。その意味で、戦後の昭和22年に書かれた『教育の新理念と農村文化』は述べておかねばならない論である。⁽¹⁷⁾ 本稿でこれまで取り上げたものがすべて戦前のものであるに対して、この論は戦後の論であるが、基本的な点において論の違いはない。太平洋戦争を隔てた大きな時代の転換期にあつて、湖人がこのような生き方をなしたということは、この時代において思想家としてみれば稀なことでもあり、また幸福なことでもあったと言える。

湖人は何より人間の自然性を重んじた。狂熱と怠惰の両極を戒めた。この姿勢は戦前、戦後を一貫しているのであつて、青年団講習所の生活と思想も、この人間の自然性を貫く生活であつたのであり、『次郎物語』第五部の友愛塾の生活もその記録である。むろんその時々個人や国家の置かれる立場というものはある。その時々課題に応じてゆかねばならないものというものはある。しかし、それは人間の自然性を崩壊せしめるものであつてはならない。そうしてみれば、戦前のあの狂熱的な軍国主義の勢いは、国家の永遠の目標というものを忘れた一時的狂熱であり、湖人の到底容れるところではなかつた。

戦後のいわゆる「自由主義」「民主主義」の時代になって、多くの教育者が新たな方針に途方に暮れ、いかに右往左往しているか。湖人はその主体性の欠如を慨嘆した。然り、真に大切なものは教育者の自律と信念なのである。一言にして言えば、自己教育である。教育はその根本において、教育者自身の自己教育に根源をおく。「しかし、全国のほとんど全部の教育者が、その自主性や信念の欠乏のゆえにそしていつも流行を遂い、迎合と便乗とに汲々としているがゆえに」この自己撞着から抜けられないではないか。

湖人とその盟友である田澤義鋪の両者に共通するのは権力への強い反骨の精神であるが、しかし、彼らは決して、体制の否定者、革命主義者ではなかつた。それどころか、彼らは燃えるような祖国への愛情を持ち、天皇への帰趨の念を忘れなかつた。しかし、彼らはそのような国家と天皇への敬愛を人間の最も自然な日常の振る舞いのうちに確保しようとした。それこそが一時的な狂熱よりも国家の永遠の理念に合致するものと考えたからである。

同時に、そういう彼らの思いすら許されなかつた時代なのである。湖人は言う。「日本は、たとえ一時的にもせよ、現在国家としての自主性を完全に喪失している。そしてこの悲しむべき事実が詮ずるところ、国民個々の自主性の喪失に原因していることが明瞭だとすれば、今後の国民の最大の努力が、その回復に向かつて注がなければならないことも、また明瞭である。思うに、自由主義的・民主主義的教育理念は、国民をその方向に導く大きな力となるであろう。しかし同時に忘れてならないことは、本来盲目的追従を許さないのが自由主義であり民主主義である、ということである。ここに教育者の自主性の回復が、自由主義・民主主義の受容に先立って要請される所以があるのである。」

戦前の軍国主義的体制のなかで「個」の自由を忘れた国民が、今度は戦後の自由主義の体制のなかで、「個」の自由に安易に溺れているさまを批判するのである。あるいはそのことすらも見失って右往左往しているさまを。真に「個」を掴むことの困難を述べるとともに、湖人の微動だにしない意志が見事に窺われる発言であろう。湖人晩年の歌に「大なる道といふもの世にありと思ふ心はいまでも消えず」（『下村湖人全短歌集成』池田書店）というものがある。湖人根底の気迫を伝えるものである。

私はこの稿を終えるにあたって、下村湖人にゆかりある二つの場所について、なお補足しておきたいのであるが、ひとつは、湖人の生家である。佐賀県神埼市千代田町にある。下村湖人生家保存会によって手厚く管理されており、筆者は一夏、そこを訪ねてみる機会に恵まれた。長崎本線の神埼駅で降りてタクシーに乗って約20分近くかかる。明治時代に建築された旧家がほぼそのままに残されており、湖人は幼少期の約10年をこの家で過ごした。家のすぐ前の田手川や筑後川に囲まれた田舎ののどかな風景のなかに次郎の家は時間を越えて残されている。生家保存会から発行されている『次郎の里』という冊子を見ると、『次郎物語』がこの風景のなかに描かれていることがよくわかるのである。この折、館長の島英彰氏から、湖人と『次郎物語』を話題にした読売新聞佐賀版の記事（2016/3/5）を提供されたのであるが、「異風者」（いひゅうもん）という言葉をそこで知った。俗に「頑固な変わり者」という意味を持つらしいが、佐賀人がこよなく愛する人間像であるらしい。「自由主義者と批判されても妥協せず自らの考えを貫いた湖人の異風者としての生き方、先進性は、まさに佐賀らしい気質だと思います」とは館長島英彰氏の言葉である。この折に撮影した写真を掲載し、『次郎物語』の面影を刻印したいと思う。

また、もうひとつは、青年団講習所の舞台であった浴恩館である。現在は「小金井市文化財センター」の名称で、玉川上水近くの武蔵小金井の地に、今なお豊かな自然を残す公園区域として保存されており、足を踏み入れれば、昔日の青年団講習所の息遣いの痕跡を窺うことができる。湖人が生活した宿舍の空林荘は2013年2月に焼失してその土台を残すのみであるのは残念であるが、『次郎物語』に描かれた友愛塾の静謐な環境を偲ぶに足りる。本館内部は展示場になっており、当時の講習所の日常生活を写真で伝えている。ここに載せた写真は幾千の字数より、その日々の青年たちの至純の熱気をさながら伝えているであろう。これも文化財センターの許可を得てここに掲載することにした。



旧浴恩館正面玄関
(著者撮影・H28.1)



下村湖人生家正面
(著者撮影・H28.8)



青年団講習所食事のひととき・昭和8(1933)年
(小金井市教育委員会提供)



湖人生家中庭から
(著者撮影・H28.8)



青年団講習所団樂のひととき・1934年ころ
左方に田澤義鋪がみえる
(小金井市教育委員会提供)



湖人生家前の田手川
(著者撮影・H28.8)

註

- ①『下村湖人全集3』(1975 国土社) p.307。また、杉山報徳社の形成過程については、並松信久「農村地域における報徳社組織の展開過程—静岡県杉山報徳社を事例として—」(農林業問題研究第64号・1981年9月)に詳説されている。それによれば、杉山報徳社誕生は、山間の貧しい村であった杉山村で、指導的立場にあった片平信明が偶然に福住正兄(二宮尊徳の高弟)の『報徳方法・富国捷徑』を読んだことがきっかけになっている。以下、並松の叙述。「経済更生の模索をしていた信明は、静養のため熱海へ行き、そこで福住正兄著『報徳方法・富国捷徑』という本を読む。信明がこの本に出合ったのは全くの偶然であったが、この一冊の本を通して信明は尊徳に農村経済更生の先達を見出して感動し、杉山村復興のために報徳社の設立を考えるようになった。』『次郎物語』の記述にある「当主九郎左衛門翁」とはこの片平信明のことであり、成長した杉山村の光景が活写されているのである。湖人の報徳思想への並々ならぬ関心が窺える。
- ②前掲『下村湖人全集3』p.238。なお、「大河無門」のモデルは大河平聖雄(おこびら としお)という人物で、湖人がその所長を勤めた大日本連合青年団の第二回社会教育研究生四人のうちのひとりであった。湖人は彼の人物と才能を高く評価し、『次郎物語』のうちに「大河無門」として生かした。後述の永杉喜輔『下村湖人伝』によると、「第五部に出る人物のなかで、その風ぼうの描写の行きとどいていること、大河平以上のものはない」。湖人の思想の核的な部分を体現する登場人物であった。
- ③下村湖人『この人を見よ』(田澤義鋪顕彰会 昭和51年)。また、財団法人田澤義鋪記念会から、永杉喜輔『青年の父 田澤義鋪』(1981)、河野義克『父 田澤義鋪と親しかった在天の人々』(1983 第38回田澤義鋪記念 講演速記録)等の冊子が発行されている。

- ④ 前掲『この人を見よ』 p.32。近代の日本人の民衆のなかに日常化されてきたアジア民衆への差別意識については、筆者は『我らのうちなる朝鮮について』（2001 時潮社）のなかで触れておいたことがある。
- ⑤ 前掲『この人を見よ』 p.78。
- ⑥ 前掲『この人を見よ』 p.137。
- ⑦ 『凡人道』は全集5に所収。『煙仲間』は全集6に所収。
- ⑧ 『次郎物語』第五部 全集3所収。
- ⑨ 同前
- ⑩ 全集4所収。また、筆者はかつて『『葉隠』の思想構造をめぐって』（国際経営・文化研究 1998.Vol.13）において、この自然の日常性への重視を「葉隠」の重要な特質であることを論じ、次のように述べておいたことがある。「今日、死ぬかも知れないと常に心にとめる武士にとって、一身の行儀を慎むことは、おのれの美を律する覚悟というものにほかならないのであろう。（中略）このように日常の所作の一つ一つへのこだわりの上にたってこそ、究極的な自己放棄も可能となるのである。」（p.200）
- ⑪ 『次郎物語』第五部 全集3所収。
- ⑫ 前掲『この人を見よ』 p.204。
- ⑬ 『煙仲間』（下村湖人全集6） p.260。
- ⑭ 「白鳥会」のモデルは湖人が佐賀中学校在学時、上級生の横暴の悪習に対して立ち上げた「誠友団」に由来することもよく知られている。その精神は「煙仲間」にも通じるもので、永杉喜輔は前掲『下村湖人伝』のなかで次のように述べている（同書59頁）。『『次郎物語』第三部の、朝倉先生を中心とした「白鳥会」には、この誠友会の生活がモデルにつかわれている。また、あとで、湖人が社会教育運動にたずさわようになってから、しきりに唱道した「煙仲間」も遠くこの会にみなもとを持っている。』なお村山輝吉に「下村湖人研究—煙仲間について—」（1）（2）と題する論文がある。駒澤大学教育学研究論集1977-1978所収。
- ⑮ 全集6所収「われらの誓願」冒頭に以下の五箇条をあげている。湖人の思いの骨子がここに集約されていることがわかるであろう。「謙虚に自己を省み、敬虔に自然と人と神とに仕え、真智・真愛・真勇の泉を生命の至深所から汲みとりたい」「独自無双なる個性の自律的前進が、同時に、調和と統一への前進であり、全一なるものの歓びであるよう行動したい」「伝統にはぐくまれ歴史を呼吸しつつ、しかも生々発展、永遠なる人類意志の流れに棹して、新しき歴史と伝統とを創造したい」「家庭と職場と郷土と国家とを一如的に把握し、日常的任務の実践を通して、念々積誠の生活を実現したい」「努めて周囲に良友を求め、相携えて郷土社会と職域社会の理想化を図り、調和と創造とに輝く新風土を、わが民族生活の随所に醸成したい」
- ⑯ 『定本 次郎物語』（池田書店 昭和44年改版第十六刷） p.517。
- ⑰ 前掲下村湖人全集6。

付記

なお本論文の執筆に伴って、筑波大学名誉教授野田茂徳氏から詳細な批評をいただく機会があった。それは、本論文の趣旨をよく把握されているということ以上に、それ自体はからずも、野田教授の時代認識や人間認識の滲み出ているものであった。それゆえ、本稿の趣旨理解のためにもその中核の部分を紹介するのが極めて有効であると考え、以下にひく。

富国強兵のスローガンが蔓延するなかで、原初的理想としての「自律・友愛・協同」を唱えることはけっしてたやすいことではなかった時代のことである。

「植民地主義」「拡張主義」の国家的欲望下では、いかなる思想も理想も、丸ごと全体主義に呑み込まれてしまう時

代でもあった。「大政翼賛」や「五族協和」などの旗がたなびくのみなくとも、国内外で「自律・友愛・協同」を実現することは困難な時代であった。そのような時代に下村湖人は、理想を実現すべく、希望を捨てないで、青年団教育の実践を追求していた。その根幹には、「自律・友愛・協同」を実現するには、自由と民主主義の土台が必要であることも明らかにしていた。

下村湖人にとって特筆すべき田澤義鋪との出会いと交流があった。日露戦争後の満州や朝鮮における日本人の傲慢さを見聞してきた田澤の世界精神こそ、その後の下村湖人の「世界認識・歴史認識」のメルクマールとなったものである。国家主義的偏狭な「愛国運動」に収斂されることのない原初的理想である「自律・友愛・協同」の倫理思想はこの田澤との交流によって早い時期に形成されたものである。このように、文学者としての下村湖人が青年団教育者としてその理想と実現を試みていた知られざる「思想家」であることを表出したのが本論文である。

(受理 平成28年8月29日)